

414
4

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

始





大正
13.3.31
製本

法隆寺大鏡第四十五集挿圖解説

第一、綱封藏 絹本着色聖徳太子御影

高三尺六寸幅二尺七寸

聖徳太子の御影は御一代中の事蹟に因みて種々に現はさるゝこと、既に繰返し説述せる所ありたり、本集收むる所また其一にして普通楊枝の御影と同影なれども、特に水鏡の御影と稱せらる、楊枝の御影とは前に云へる如く太子自ら楊枝を以て寫し給へるものと傳へ、楊枝とは佛家十八物の中なる口を嗽く其の稱なれど此處には杖の意味を表し、要するに木の杖もて書き留め給へりとの義なり、水鏡の御影と稱するも亦太子自ら御姿を水鏡に寫して、其真を描き給ひし上の傳説にて、何れも太子自筆の御影と云ふに外ならざるなり、從つて其形像同一なれども、自筆と傳へざるものとは自ら異る所あり、其筆跡冠を戴き兩手に笏を把り給ふ所、儲貳の服と知られたる朱華の冠を着て坐し給ふ所は他にも存せざるにあらねど、佩飾の姿にての坐像は此御影の特色なり、其太子自筆との傳説は姑く措き、本像の最も古き歴史を有するものは本寺にも存せず、上代の筆意を傳へしものまた他にも見ること無し、本像の如き料絹三幅を腰ぎて一鋪と爲し、畫技の到らざるに由れるかは知らねど、形體極直にして笏を把握せる手付など、特に彫刻風の存するを見れば、或は古様を草して、鎌倉時代の木業に造れるものにあらざるか、此時代は本寺が造営に修理に其功を興して面目を一新し、上宮太子の尊崇も、本寺のみならず關係ある諸寺に於て大に興り、彫刻に繪畫に御影造像の



最も盛なりしを見れば、時勢よりしても之を其期の作と認むるに因由あるを知るべし、此種の御影は足利時代に入りて變幕を懸け御正體の鏡をつけ背景にいろ／＼莊嚴を施さるゝに至り、色彩の濃潤はあれど反つて俗惡の臭味を加ふるを常とするに至れり、本像に在りては然らず、無用の莊嚴未だ之を現すを見ざるなり。

第二、第五、御物 金銅四十八體佛

其廿八 高一尺二寸三分
其廿九 高一尺二寸三分
其三十 高一尺二寸三分

其廿八は觀世音菩薩の像なり、菩薩像にして瓊釧耳環を撒し胸飾のみを存したるは、莊嚴の最も簡素なるものと云ふべし、此簡素の意は肉取りの薄き彫法にも現はされて、肉體と着衣とのなづみに妙をとり、瀟洒たる風貌眞に樹下石上涼風に浴して立てる天女を見るが如し、像は間敷蓮華座を以て承けられ、蓮華は張の強き胡桃形蓮座の上に安ぜられ、像との調和に於て頗る心を致し、を見る。其廿九は釋迦如來像なるべきか、遽に斷言し易からず、技巧未だ精熟の境に入らざるもの、或は別傳傳來ならんも保し難し。其三十及三十一は俱に觀世音菩薩像なり、瘦軀長身、珠飾また之に叶へるものを用ひしこと前集に説けると同じ、裳には腰を懸へる意味のみ現はされて、上に塞げられたる銀文甚だしく、天衣は膝の邊にて正しく交叉したるあり、又並行的に懸れるもあり、交叉式のものには背後に長く垂れ、並行的のものは背後にありてもまた直に兩肩を蔽へるを見る、珠飾も胸より垂れたるのみのものあり、胸のみな



若洲寺大藏第四十五卷藏對觀

此の巻は、若洲寺の大藏に属するもので、其の巻頭に「若洲寺大藏第四十五卷藏對觀」とあり、其の巻の内容は、佛經の經文と對觀の圖とを載せしむるものなり。其の對觀の圖は、佛經の經文と對觀の圖とを載せしむるものなり。其の對觀の圖は、佛經の經文と對觀の圖とを載せしむるものなり。

此の巻は、若洲寺の大藏に属するもので、其の巻頭に「若洲寺大藏第四十五卷藏對觀」とあり、其の巻の内容は、佛經の經文と對觀の圖とを載せしむるものなり。其の對觀の圖は、佛經の經文と對觀の圖とを載せしむるものなり。

らず腰帯より懸れるもあり、腰帯より懸れるもの、環を用たるなど、此像によりて其作法を考ふるに足る、兩像とも裳の縁及蓮瓣の端、臺座の輪廓等を直線或は曲線のまゝに存せずして、悉く點線式に成れるも亦奇とすべし、此等の様式よりして見れば、未だ唐風の影響甚だしきに至らず、朝鮮系の彫刻尙は有力なるもの存するを知るべし。

第六、第七、網封藏六角厨子

高一尺四寸五分 幅一尺六寸五分

此厨子も何を安置したりしか今放ふべからず、其制六角形を爲し、外面は黒漆にて塗り、内側は板壁の上に胡粉地をつくりて、極彩色の繪をものせり、圖に示せるは本尊の背後に當るべき部分と、扉の裏面とを現はせるなり、一は滄波渺茫、飛龍天に沖せんとし、海島の峯巒層重、松樹影深き處に麈鹿遊び、雲霧固く封ずる處に梵宮あり、一は二階山中に相對して立ち、其間に多寶塔の存するあり、松高く延び或は低く倒垂し、何れの景色を眺めても山柔かに木立の姿美はしく、唯是れ大和の國に於て見らるべき實景より想を構へて、所謂大和繪山水を寫し出せるなり、繪巻物にも斯る風景を收めざるにあらず、世の當に見る所よりは規模大きくして、殊に樹木の描寫に妙を示し、鎌倉時代の末葉より盛行はれたる春日曼荼羅山王曼荼羅圖の如く、神祕佛土の現景をいとも微細に穿ちて、其間に靈蹟としての因縁を語らんとするものと頗る相似たる所あり、波の描法の如きも唐招提寺の東征繪傳と酷肖する所あるよりすれば、益以て其時代を同するを思はしむ、これ即ち南都春日繪所の手に成れ

るものにして、其様式と特色とを窺ふに於て、最も優秀なる作品と稱せざるを得ず。

第八、網封藏 彩色百萬塔

第九、同 組立百萬塔

第十、同 隨羅尼各種

百萬塔は孝謙太上天皇の御宇天平實字八年惠美押勝の亂平さしを以て、無垢淨光大隨羅尼經が造塔供養の功德を稱へて、一切の罪障みな消除し壽命無量限りなしとの趣旨に本づき、東大法隆を始めとして十大寺に各千萬基即ち總數百萬基を施入せられしものと云ふ、其事既に大鏡の初集に於て盡し、を以て、今改めて説かざるべし、其數の百萬と稱するよりしては、機械的に同型の者を迅速に造れるものと思はるれども、十大寺中獨り之を今日に保存し得たる法隆寺の藏所に依りて檢するに、事實は全く同型のもののみを造りしにあらず千位毎に節塔を造り、十萬にして十三層塔に達せしむるあり、又同じ三層塔即ち最も通用なるべきものも多くは相輪の部分のみを別材に造りて、之を塔身に嵌込む装置なれども、中には圖に示せる如く別様の組立式をとれるものあり、或は塔身を二分して造り、或は三部分よりし、或は毎層塔組立てたるものもありしが如し、手法種々にして殘存せるもの凡十數基各其制を異にするあり、其若色も普通は胡粉にて塗れるのみなれども、中には群青と綠青とを彩どり、或は綠青と朱とを以てし、又或者は黄土若くは朱を施せるが如きあり、此種の殘存せるもの數基あり、圖に示せる節塔の蓮花座は其最

も精巧なるものにして、各層みな是はしき彩色より成れり、其
他圖には收めざれど基底面に墨書の文字あるもの少からず、多くは
年月人名、稀には合符の如き文字を記せるもあり、其最も珍なるは
綠青を塗れる上に内裏の二字あるものなり、以て一寺の分十萬葉の
中にも形式若色其他體裁の同一摸に出でざる者の存せしを知に足ら
む、每基みな中に陀羅尼の小卷を收めたり、續紀稱徳天皇紀にも露
盤の下に各根本慈心自心印の相輪六度等の陀羅尼を置くとあり、圖
に示せるものまた此四種にして、卷首に無垢淨光經とあれば、此經
の陀羅尼を録せしこと明かなり、されど同經には根本相輪修造佛塔
自心印大功徳聚六波羅蜜の六種の陀羅尼を録するを以て、現存する
所は四種なれども、もとは六種ならんかとも疑なき能はず、然なが
ら此は續紀に明かなる如く四種を限りとすべく、決して他に二種あ
りしにあらざる也、淨光經に録する所にては、根本相輪修造塔自心
印の四種は書寫して塔中に納置すべきものにして、大功徳聚及六波
羅蜜の二種は至心に念誦すべきものと説けり、六波羅蜜陀羅尼は即
ち六度陀羅尼にして、念誦すれば事足れるものながら、百萬塔内は
明かに之を納置するが如く、必ずしも淨光經の本文によりて書寫
せしにあらざりして、續紀の文には等字を用ひて、四種の外に餘分あ
るを示す如くなるも、四種は即ち現存の者と符合して増減なきより
見て、當初よりして本文に拘泥せず、唯四種のみを書寫納置せしこ
と決して疑を容れざる所なり、殊に陀羅尼は小き黃紙の片を以て卷
かれ、其上に一二三四の標記あり、其順序は淨光經所載の次第に合
し、根本を第一として六度を第四とせるを以て見ても、其四種陀羅

尼をとりて他の二種に及ばざりしこと益以て明かなりと云ふべし、
數年以前本寺が其小塔を一般に配布せんとせし時には、陀羅尼の略
見るに足るべきもの、根本三百十一卷相輪四百十卷自心印九百八十
卷六度七卷ありしと云ふ、六度の咒言最も短くして然かも珍重せら
る、所以、其殘存の極めて少きに由れるを思ふべし、次は根本相輪自
心印の順序となる、此印刷に就きては古來紛々たる議論あれども、
之を銅版印刷と見るに至當とす、果して然らばこれ經典印刷否印刷
法の起原よりして、世界最古の嚆矢となるものにして、水へに記
念せらるべき遺品たるを失はず、印刷のもの固より尊しと雖も、こ
の數多なる陀羅尼中に肉寫のもの三卷を存するは、また珍とするに
足るべし、二卷は自心印にして一卷は相輪なり、每卷裏面の末尾に
寫手の名を録す、自心印の一には大湯坐千國とあり、其名正倉院文
書の中にも見えたる人なり、此等は更に號を改めて紹介することゝ
すべし、

第十一、西大門

西大門造立の記事、いち早く本寺の記録に見えたるは別當記に載す
る所の久國成儀師の條なり、其文に
此任中西大門造立之
とあり、同師の別當在任は長元八年八月廿七日に始まりて五ヶ年と
あり、長曆三年十二月觀音大徳之に代はれるなれば、西大門の造立
は長元長曆間即ち後一條天皇の末年より後朱雀天皇の初年にかけて
の間に成れるなり、これ創立か再建か得て致ふべからず、尚別當記

其後曼曼法印權大僧治世の時、嘉祿三年九月同門修理の記事あり、其用途の内十五石は別當の沙汰、殘る所は寺用佛事等より寄進せしめて之を辨ずる由を載す、蓋に降りて徳川時代に成れる古今一陽集には、貞享元年十一月五日夜丑下廻焼失の事を録す、此時蓋別當記所載の建築修補を経て保存せられしものか、今に於て之を尋探するの記録なきを遺憾とす、次て一陽集は焼失の翌年假門を造り、元禄十年に至りて新造せしもの即ち現今の建築なりと傳ふ、圖に示せるは即ち是にして、江戸時代の特徵を有する四足門なり、面取控柱の面幅一寸一分ありて、柱の面内幅の一尺一寸に比し其十分一に相當すれども、所謂十面取よりは少しく小なり、斗拱は唐様の三ツ斗を用ひ、幸輪の上に大盤股ありて大虹梁を支へ、梁上に東柱を立て、棟木を承く、幸輪の如き動物的形式を具し、またよく江戸時代の手法を現はせり、一陽集の傳ふる所其だ簡なれども、斯る大建築を元禄時代に營み得たる所以のものは、或は金堂の修補と同じく、柱昌院の助力に依れるものにあらざるか、

中之間天蓋即ち釋迦如來の上に醫せるものは、前集に説ける西之間天蓋と同形式に係り、唯少しく其形を大にするのみなれば、今改めて累説せず、東之間天蓋即ち榮師加來の上に懸れるものは、鎌倉時代の章造にして、形式は西之間の分をとりながら、全く其時代の手法を現はせるのみならず、精粗優劣の相違甚だしきものあり、試に本集に示せる中之間の外側局部の圖なる圓形文様をとりて、東之間の同圖と比較せば、彼は點線を以て二重玉縁を畫き、其間に色輪を施せるにも係はらず、是は色輪を幅細く畫きて上に點線を施せるのみにて、其意味を失へるものと云ふべく、内部の支輪欄間の比例も舊物に比して其美を缺けりと云はざるを得ず、其飛天鳳凰の如きも鎌倉時代の寫生風隱約の間に存し、忠實に章造せる結果かば知らねど、總して飛動自由の形なく、原作に似て非なるものたること、此圖を見たるのみにても判然疑なかるべし、先年修理の際、天蓋屋上に天福云々の墨書を見せしは、則ち其章造の年代を語れるものにあらざるか、天福年度は曼曼法印が別當在職中に屬し、西大門上宮王院南大門等の修理に着手し、又新に西圓堂を營造し、土木の工事大に起れるのみならず、中門の金剛力士像及五重塔北方なる涅槃涅槃像等を修理し彩色を新にするなど、造像の手入もまた珍らしく行はれたり、天蓋新造の記事は存せざれども、此復舊機蓮の旺盛なる時期に際して、損亡したる天蓋を補足せんとするは、其謂れあること、云ふべく、天福云々の墨書は正しく新造時に成れるものと信じて可なるが如し、此補足ありしが爲に三個の天蓋並び懸りて三尊如來を莊嚴し、併せて金堂の美觀を今に全うするを得たる所以なり、

には其後曼曼法印權大僧治世の時、嘉祿三年九月同門修理の記事あり、其用途の内十五石は別當の沙汰、殘る所は寺用佛事等より寄進せしめて之を辨ずる由を載す、蓋に降りて徳川時代に成れる古今一陽集には、貞享元年十一月五日夜丑下廻焼失の事を録す、此時蓋別當記所載の建築修補を経て保存せられしものか、今に於て之を尋探するの記録なきを遺憾とす、次て一陽集は焼失の翌年假門を造り、元禄十年に至りて新造せしもの即ち現今の建築なりと傳ふ、圖に示せるは即ち是にして、江戸時代の特徵を有する四足門なり、面取控柱の面幅一寸一分ありて、柱の面内幅の一尺一寸に比し其十分一に相當すれども、所謂十面取よりは少しく小なり、斗拱は唐様の三ツ斗を用ひ、幸輪の上に大盤股ありて大虹梁を支へ、梁上に東柱を立て、棟木を承く、幸輪の如き動物的形式を具し、またよく江戸時代の手法を現はせり、一陽集の傳ふる所其だ簡なれども、斯る大建築を元禄時代に營み得たる所以のものは、或は金堂の修補と同じく、柱昌院の助力に依れるものにあらざるか、

中之間天蓋即ち釋迦如來の上に醫せるものは、前集に説ける西之間天蓋と同形式に係り、唯少しく其形を大にするのみなれば、今改めて累説せず、東之間天蓋即ち榮師加來の上に懸れるものは、鎌倉時代の章造にして、形式は西之間の分をとりながら、全く其時代の手法を現はせるのみならず、精粗優劣の相違甚だしきものあり、試に本集に示せる中之間の外側局部の圖なる圓形文様をとりて、東之間の同圖と比較せば、彼は點線を以て二重玉縁を畫き、其間に色輪を施せるにも係はらず、是は色輪を幅細く畫きて上に點線を施せるのみにて、其意味を失へるものと云ふべく、内部の支輪欄間の比例も舊物に比して其美を缺けりと云はざるを得ず、其飛天鳳凰の如きも鎌倉時代の寫生風隱約の間に存し、忠實に章造せる結果かば知らねど、總して飛動自由の形なく、原作に似て非なるものたること、此圖を見たるのみにても判然疑なかるべし、先年修理の際、天蓋屋上に天福云々の墨書を見せしは、則ち其章造の年代を語れるものにあらざるか、天福年度は曼曼法印が別當在職中に屬し、西大門上宮王院南大門等の修理に着手し、又新に西圓堂を營造し、土木の工事大に起れるのみならず、中門の金剛力士像及五重塔北方なる涅槃涅槃像等を修理し彩色を新にするなど、造像の手入もまた珍らしく行はれたり、天蓋新造の記事は存せざれども、此復舊機蓮の旺盛なる時期に際して、損亡したる天蓋を補足せんとするは、其謂れあること、云ふべく、天福云々の墨書は正しく新造時に成れるものと信じて可なるが如し、此補足ありしが爲に三個の天蓋並び懸りて三尊如來を莊嚴し、併せて金堂の美觀を今に全うするを得たる所以なり、

- 第十二、金堂 中之間天蓋 高四尺、幅八尺五寸
- 第十三、同 同局部
- 第十四、同 同鏤金物
- 第十五、同 東之間天蓋
- 第十六、同 同後面
- 第十七、同 同内面
- 第十八、同 同飛天及鳳凰



阿彌陀佛

第...卷

Handwritten text in Chinese characters, arranged in vertical columns. The text is densely packed and appears to be a transcription or commentary. A horizontal line is visible across the middle of the text block.



佛牙舍利塔

图1 1. 佛牙舍利塔 2. 佛牙舍利塔



石像

石像 佛 八 尊 像 一 尊 像 一 尊 像



阿彌陀佛

佛國八十四聖像 一物



阿彌陀佛

阿彌陀佛 阿彌陀佛 阿彌陀佛

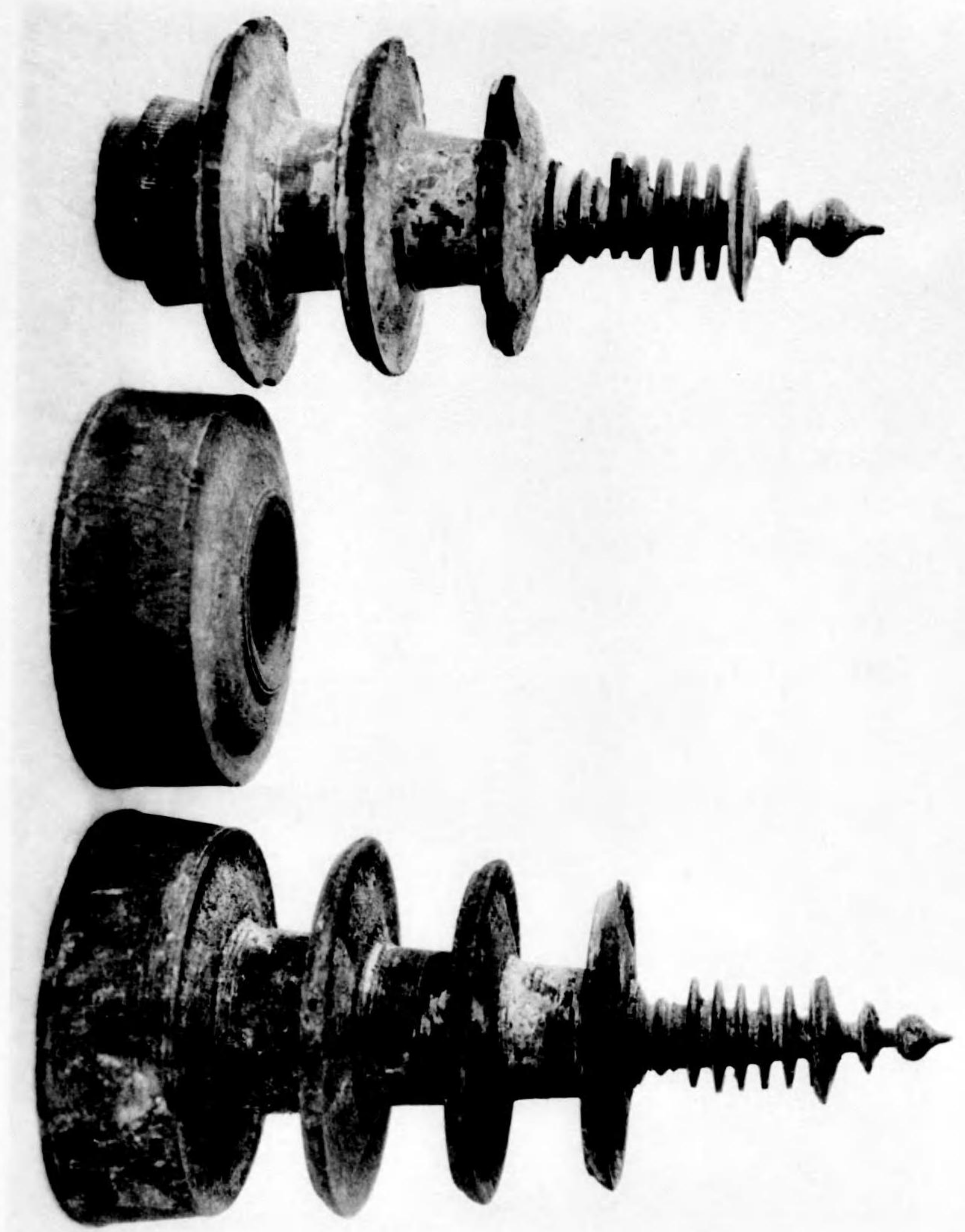


石湖山房



Vertical text or a signature, possibly a collector's mark or a seal, located below the painting on the left page.

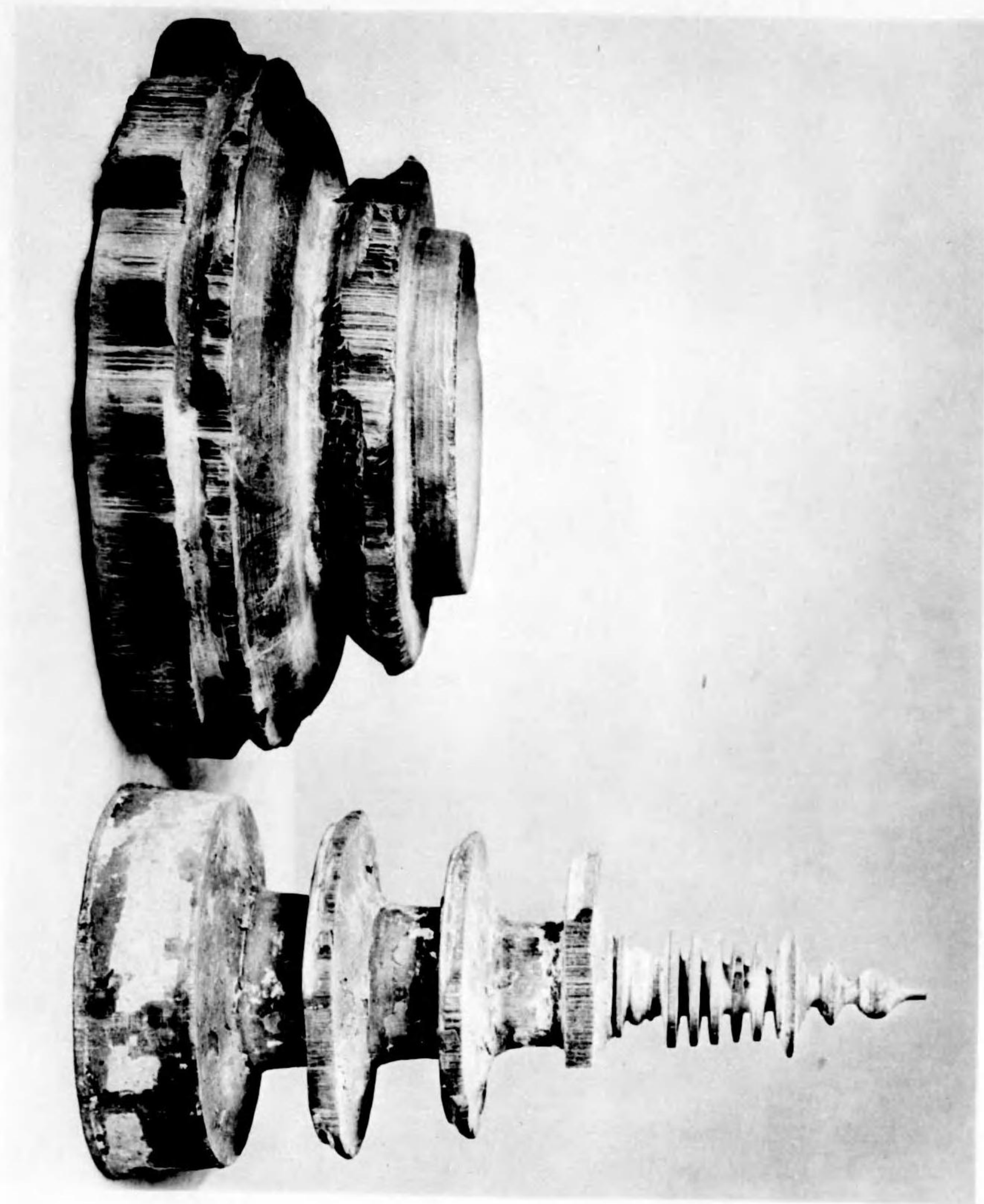
Faint horizontal text or a signature, possibly a collector's mark or a seal, located below the painting on the left page.



銅器 五件 銅針

國立中央研究院
歷史語言研究所

52-11

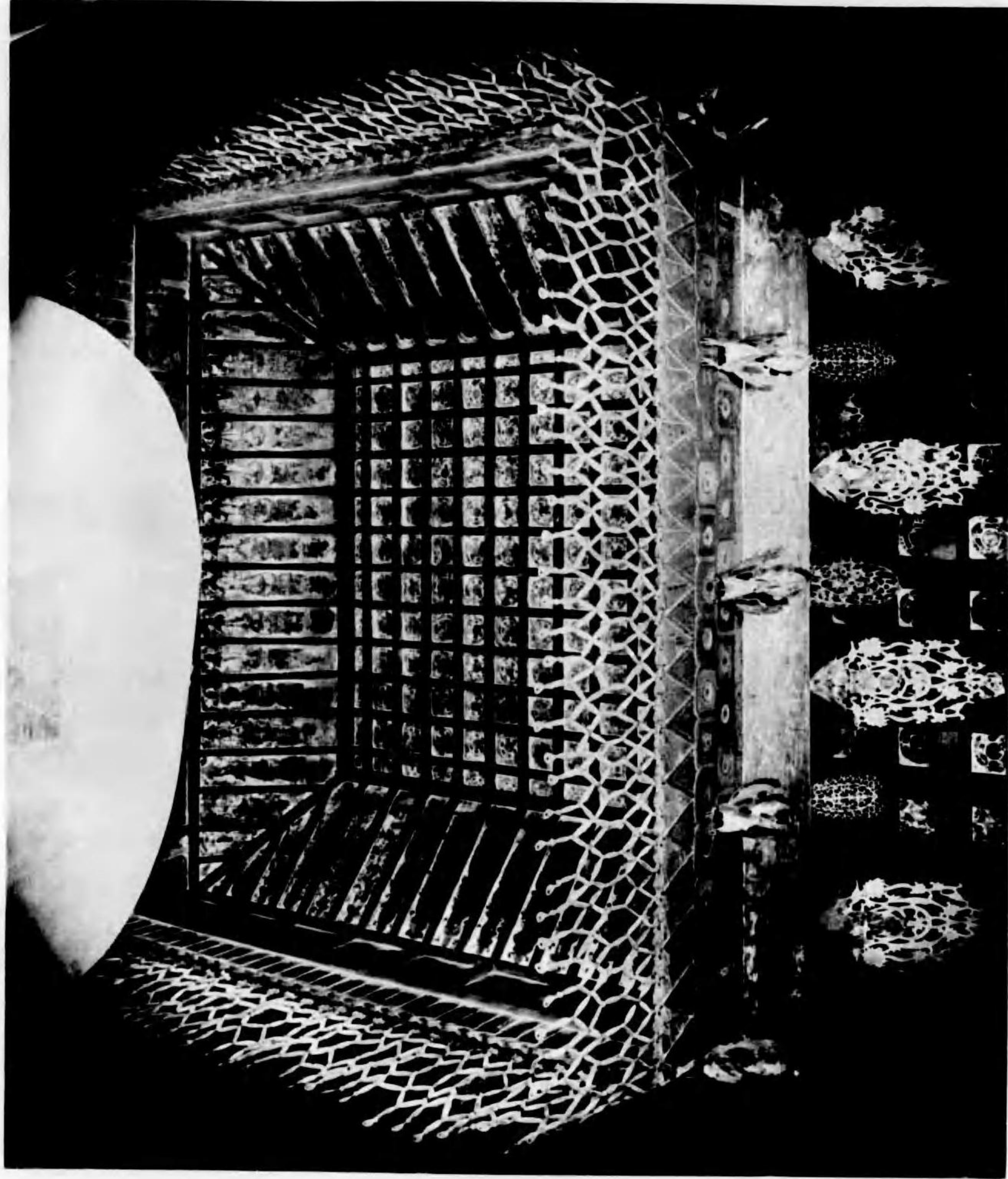


西周 尊

西周 尊

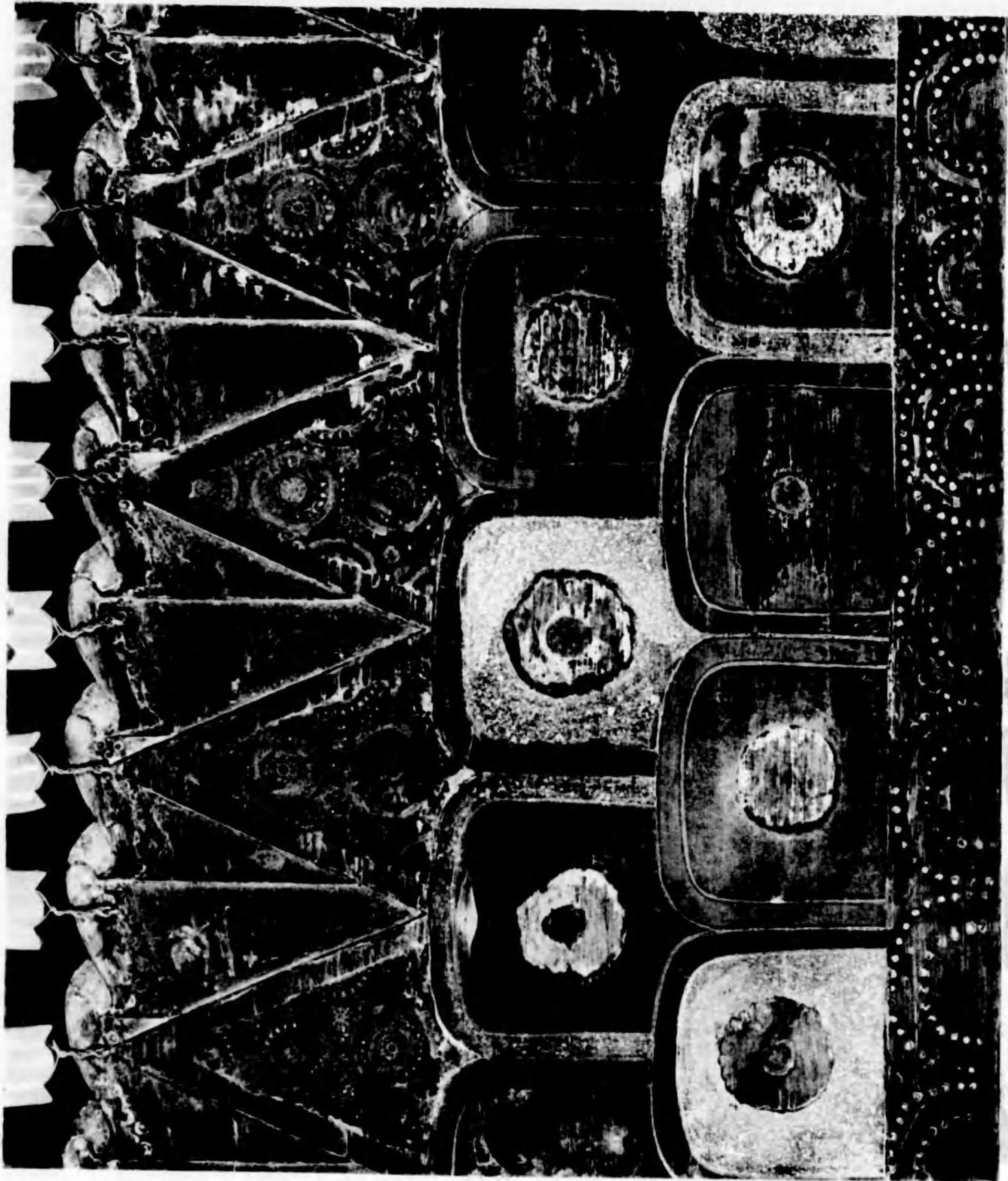


Photograph of a traditional East Asian building, possibly a temple or palace structure, showing architectural details like eaves and wooden beams.



北京故宫博物院

故宫博物院



PLANT STEM

PLANT STEM

PLANT STEM

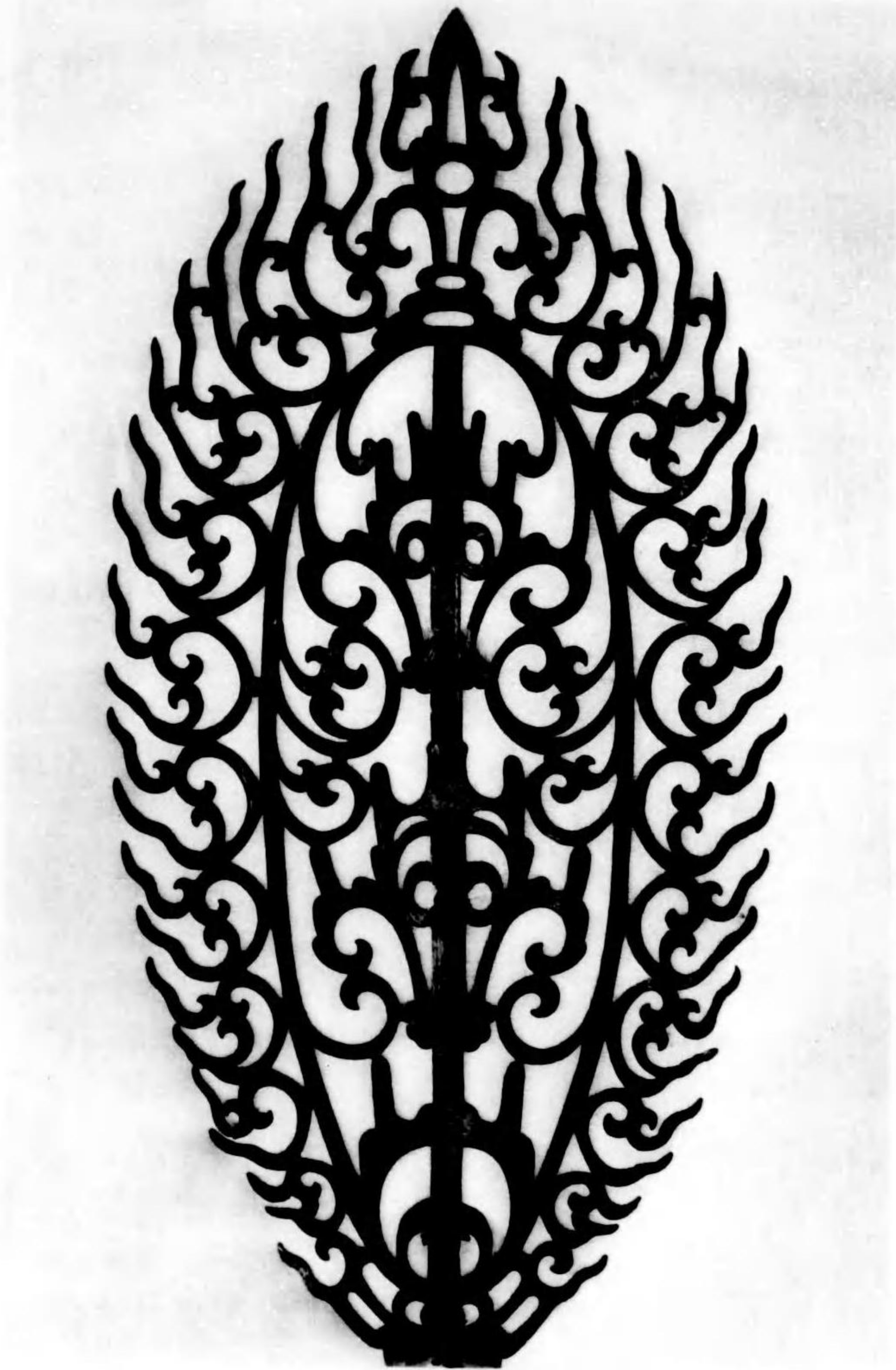
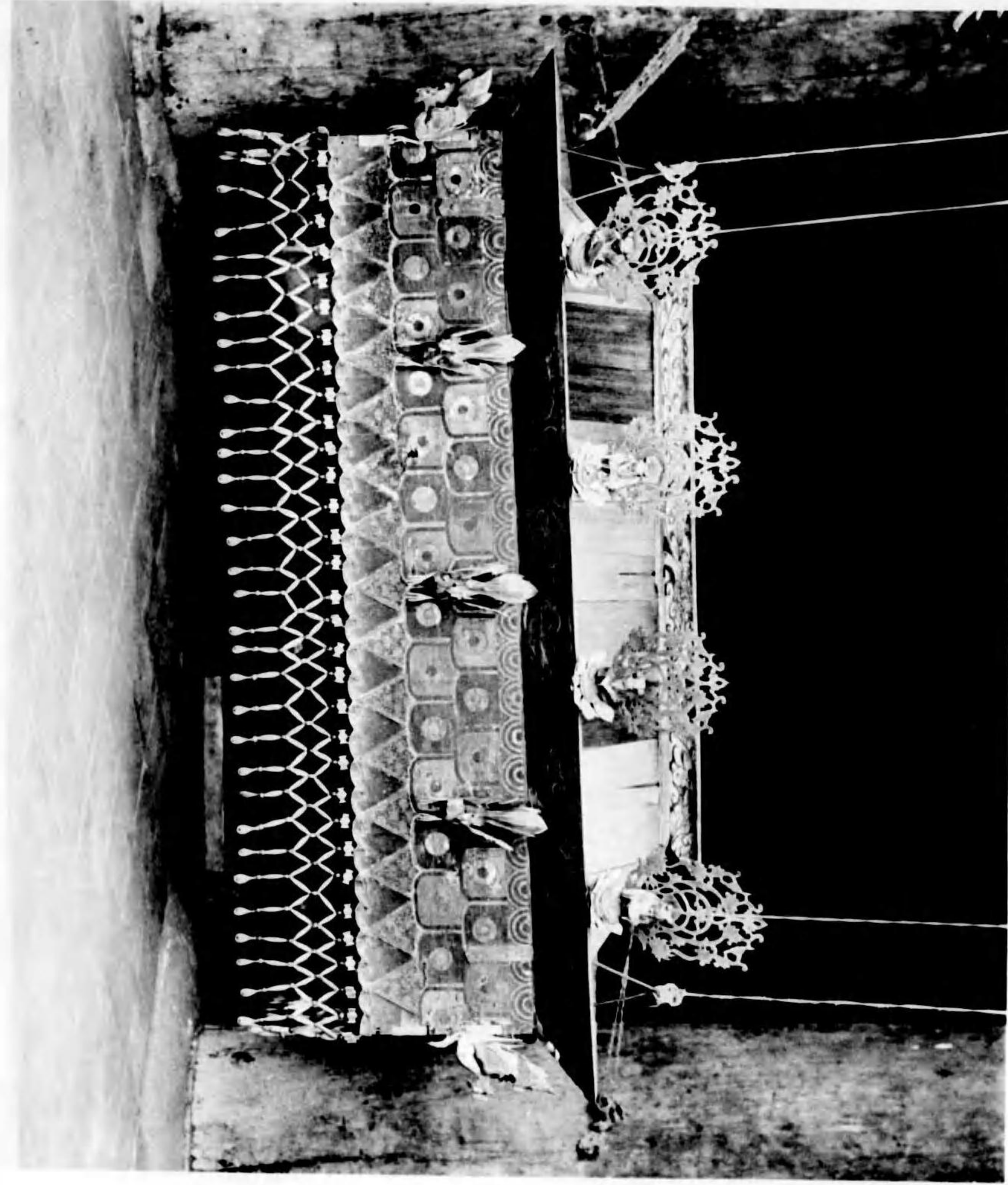
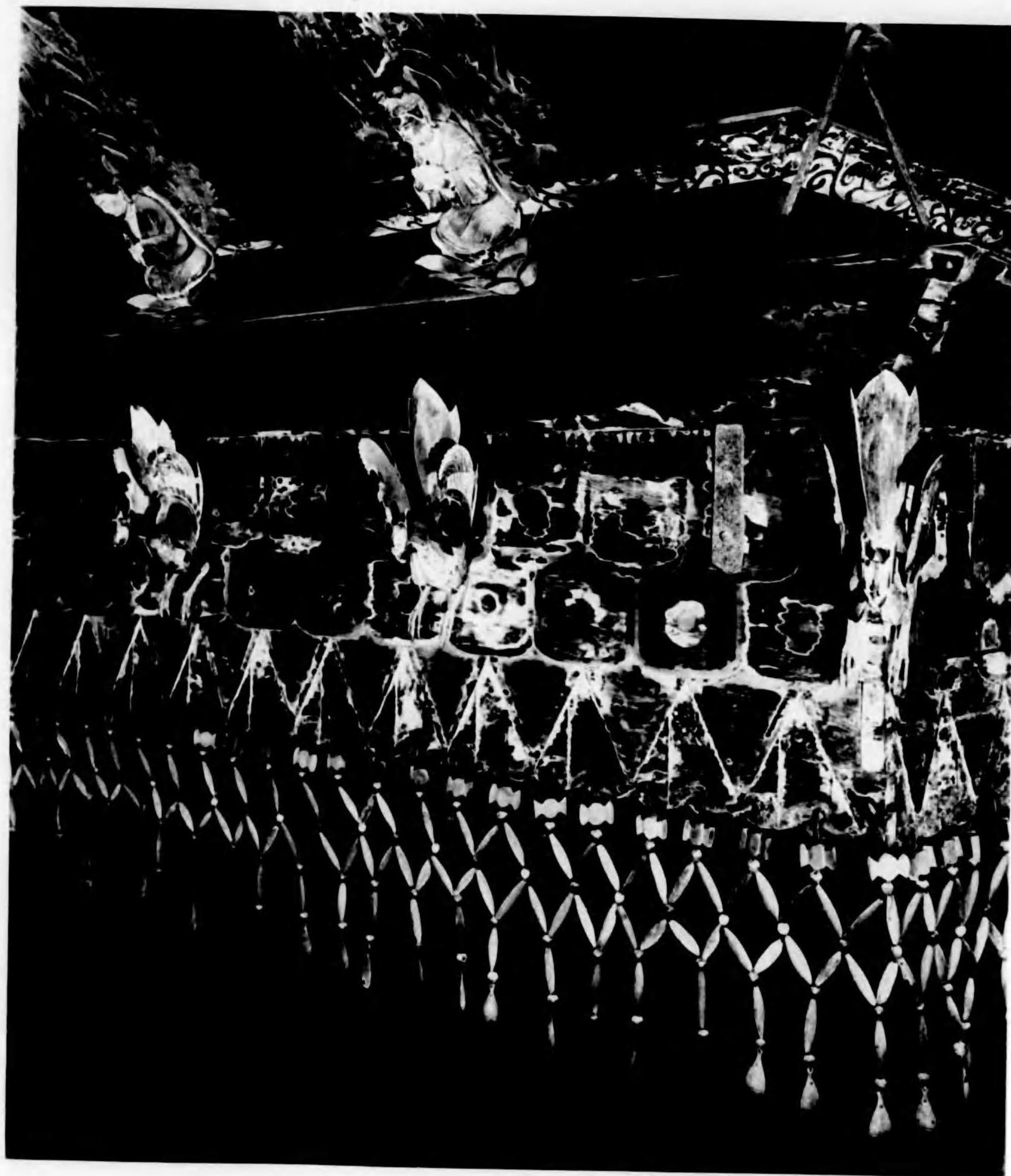


图 45-1 装饰图案

图 45-1 装饰图案



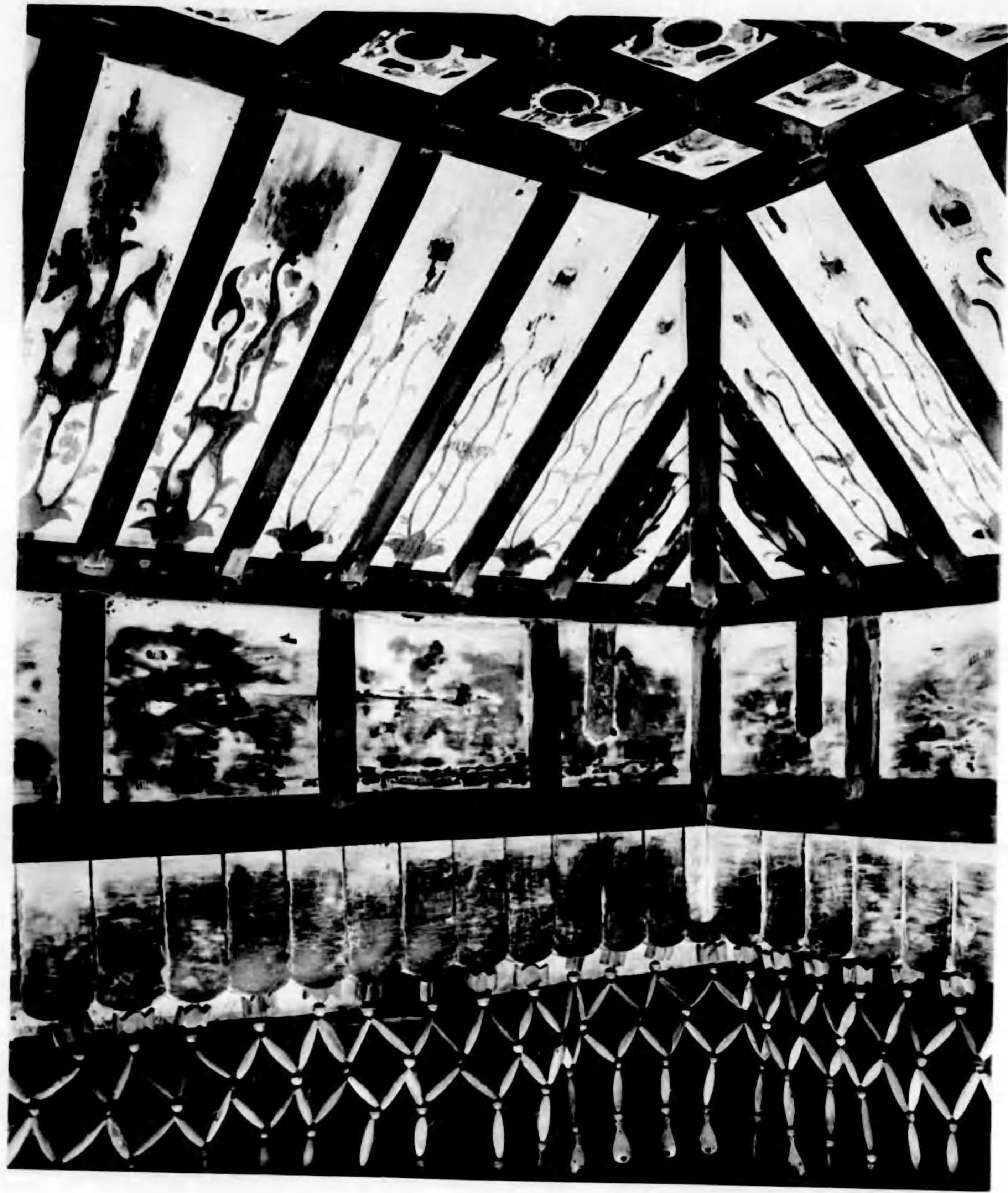
1955年5月



THE PHOTOGRAPHIC

1915

1915



THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS



蓮華菩薩像

蓮華菩薩像

大正六年七月廿七日印刷
大正六年七月三十日發行

大和國法隆寺藏版
東京美術學校編輯

發行者 東京市下谷區上根岸町百廿二番地 白石村治
印刷者 東京市下谷區中根岸町六十八番地 武田勝之助
印刷所 東京市下谷區中根岸町六十八番地 墨彩堂

終

